PRESS RELEASE

岡山大学
OKAYAMA UNIVERSITY

岡山大学記者クラブ　御中

令和７年７月１日
岡　山　大　学

岡山大学・三宅医院・ウィーメックスの３者で
無痛分娩の現場における課題解決に向けた共同研究を開始！

◆発表のポイント

・全国的に安全な施行が課題となっている無痛分娩※1) における、人員不足と安全管理を同時に解決するための遠隔医療を行う研究を開始しました。

・無痛分娩の重要な処置である硬膜外麻酔※2) を必ず麻酔科医が行い、その後の管理も必ず麻酔科医が行うことを原則としています。

・麻酔科医がベッドサイドに不在の場合でも、遠隔医療システムを用いてリアルタイムで妊婦さんの診察および治療介入が可能になります。

岡山大学病院麻酔科蘇生科は、開業産院である三宅医院グループ三宅医院（岡山市南区）、PHCホールディングス株式会社（本社：東京都千代田区）傘下のウィーメックス株式会社（本社：東京都渋谷区）と協力し、遠隔医療システムを用いて妊婦さんに安心して無痛分娩を施行するシステムの共同研究を開始しました。日本では過去に、無痛分娩における死亡事故が報告されており、安全な無痛分娩の管理体制の構築が求められています。そのためには、専門家である麻酔科医が硬膜外麻酔を施行し、薬剤のコントロールを含めた管理を行う体制が必要ですが、麻酔科医不足により全国的な無痛分娩の普及率は低いままです。

本研究では、無痛分娩希望の妊婦さんが入院した場合、岡山大学病院の麻酔科医が三宅医院に出向き、硬膜外麻酔を施行します。安全な硬膜外麻酔の導入が確認され麻酔が安定したら、麻酔科医は岡山大学病院へ戻り、通常業務を行いながら、ウィーメックス社提供の遠隔医療システム「Teladoc HEALTH」を用いて定期的に妊婦さんの診察を行います。分娩の進行に合わせた疼痛コントロール、呼吸循環に問題ないか、その他硬膜外麻酔に付随する問題点などを診察し、問題があれば解決します。麻酔科医が直接介入するべき場合は、三宅医院を再度訪問し、治療を行います。

まずは患者満足度の向上がみられるかを本研究で検討し、その後安全性を検討する研究に発展させる計画です。

◆研究者からのひとこと

無痛分娩の安全な施行に麻酔科医が果たす役割は大きいですが、現状は人手不足により全ての妊婦さんの要望に応えられていないと考えています。麻酔科医が常時ベッドサイドにいなくても、遠隔医療を導入することで妊婦さんの安全が担保できるようになれば、無痛分娩を安全に行える施設が増え、妊婦さんが住み慣れた地域で安心してお産を行えるようになるのではと考えています。

金澤　講師

■発表内容

＜現状＞

無痛分娩による妊婦死亡が全国的に報道され、社会的な問題になりました。欧米では、一般的である分娩時の疼痛緩和は、日本では認知度が低い・人的資源が少ないなどの問題で普及率は低いままです。無痛分娩のほとんどは硬膜外麻酔で行われます。硬膜外麻酔は、現在では麻酔科医が行うことが一般的ですが、歴史的には、外科医、産科医などが行っていたこともあり、現在でもそのような施設は存在します。麻酔科医が硬膜外麻酔の専門家として無痛分娩に関わることで、安全な無痛分娩の提供が可能になると考えていますが、現状では麻酔科医不足により無痛分娩を行えない施設が多く存在します。他方で麻酔科医の介在しない無痛分娩を行っている施設も多く存在し、そのような場合、妊婦の皆さまにとって必ずしも安全な環境が提供されていない可能性が残ります。

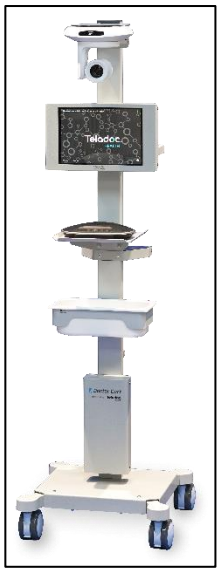
＜研究内容＞

岡山大学病院麻酔科蘇生科は、開業産院である三宅医院グループ三宅医院、ウィーメックス株式会社と協力し、遠隔医療システムを用いて妊婦さんに安心して無痛分娩を施行するシステムの研究を開始しました。本研究は、硬膜外麻酔の専門家である麻酔科医が処置を行い、その後の疼痛コントロールも遠隔医療システムを用いて管理し、妊婦さんに満足いただける無痛分娩が提供できるかを検討するものです。

三宅医院で、無痛分娩希望の妊婦さんが入院し、無痛分娩の開始を希望した場合、岡山大学病院麻酔科蘇生科に連絡が入り、なるべく遅延のないよう三宅医院に麻酔科医が派遣されます。麻酔科医が三宅医院に到着後、妊婦さんの情報を確認した後、硬膜外麻酔を施行します。硬膜外麻酔は、脊髄を覆っている硬膜の外側にチューブを挿入し、チューブに局所麻酔薬を投与することで、局所麻酔薬が広がった領域の脊髄神経が一時的にブロックされ鎮痛効果を発揮します。チューブが脊髄腔内や血管内に誤挿入されていないことを確認し、薬剤の投与を開始します。開始後数時間は、ベッドサイドで妊婦さんの観察を行い呼吸・循環に問題のないことを確認します。妊婦さんが安定していることが確認できた場合、遠隔診療システムを開始します。

本研究では、ウィーメックス株式会社が提供するリアルタイム遠隔医療システム「Teladoc HEALTH」を使用します。これにより、高画質の画面を通して妊婦さんを診察することが可能で、バイタルサインの共有、疼痛除去の程度や範囲、下肢の運動障害がないか、などを含む硬膜外麻酔に関するほとんどの情報が遠隔で共有できます。麻酔科医が岡山大学病院に帰院した後、遠隔診療システムを用いて分娩が終了するまで定期的に妊婦さんを診察し、問題がないかを確認しながら分娩が進行します。出産後、出血などの問題がないこと、麻酔科医の介入が必要ないことを確認し、遠隔医療を終了いたします。終了後、妊婦の皆さまにアンケートを記入していただき、分娩中の満足度や安心感などを調査します。

現在、同意いただいた妊婦の皆さまに遠隔医療を提供しており、計画は順調に進んでいます。



リアルタイム遠隔医療システム「Doctor Cart powered by Teladoc HEALTH」▶

＜社会的な意義＞

分娩中の疼痛緩和は、妊婦の皆さまの希望があれば提供される環境になるべきでありますが、現状では医療体制の問題、特に人的資源の問題で十分に提供できていません。本研究が進行し、遠隔医療を併用することで妊婦の皆さまに安心して無痛分娩が提供できる環境ができれば、無痛分娩が日本全国に広まる可能性があり、安全な分娩体制の構築、ひいては出生数の増加につながる可能性もあると考えており、少子高齢化が進む日本において重要な役割を果たすのではないかと考えています。

■補足・用語説明

※1）無痛分娩

無痛分娩とは、麻酔を用いて出産に伴う陣痛を最小限に抑えることを目的とした出産方法で、硬膜外麻酔という麻酔方法が用いられます。

※2）硬膜外麻酔

脊髄を覆っている硬膜の外側、硬膜外腔に局所麻酔薬を投与する麻酔方法です。カテーテルを留置して持続的に薬を注入する方法が一般的で、疼痛のコントロールをする麻酔です。

＜お問い合わせ＞
岡山大学学術研究院　医療開発領域　小児麻酔科
講師　金澤　伴幸
（電話番号）086-235-7778
（メール）　masui2@okayama-u.ac.jp

Japan. Committed to the SDGs
岡山大学 OKAYAMA UNIVERSITY
SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
岡山大学は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。
3 すべての人に健康と福祉を